

子どもたちとの生活のなかで

大木 千佳子

朝、電車に乗って幼稚園に向かいながら、私はいろんなことを考える。今日はT児は何をして遊ぶだろうか。昨日の続きでY児のやっているカクレンジャーごっこに入りたいと思うのかな。それとも新しい何かに興味を持つのだろうか。何よりもまず、元気に幼稚園にやってきてほしい。

T児は、心身に障害のあると思われる幼児（特別保育児といっている）として本年度入園してきた。

そして私は、保育者一年目のひよっこ先生。初めて出会ったのがT児と彼が所属する四歳児M組の子どもたち。幼稚園に入って初めてのお正月を迎え、三学期を迎えて二週目の子どもたちは、冬休み中に家で経験したことがあるカルタを友だちと始めたり、二学期に楽しんだ遊びを友だち同士で誘いあって始めたりしている。そんな中でT児は、友だちと一緒にいいという思いを持ち始めているようだ。

さあ、今日はどんな一日になるだろうか。登園してきた子どもたちと挨拶を交わしていると、自然に心が高揚してくる。少しゆっくりめにT児が登園してきた。「おはよう」と声をかけると私をちらっと見て、それから保育室の中を見回して、朝の身仕度を始める。今日もT児の園服は裏返しのままかかっている。この頃はよくこのようなことがある。

そういえば、T児は入園式のときは園服が嫌で着なかつたんだっけ。二週間ほどして園服を着たら今度は脱ぐのが嫌になったんだっけ。そして、二学期の中頃初めて自分から園服を脱いだ日の帰りには、お母さんの顔を見るなり「今日園服脱いだよ」と自分で報告したんだっけ。ハンガーにかけるときには脱いだときに裏返しになった園服を表に戻し、ハンガーから園服がずり落ちないようにボタンをかける必要がある。それを始めは私にやってもらい、そのうち担任のもう一人の保育者にやってもらいに行くようになり、そのかわりの中でT児はテーブルの

上でボタンかけができるようになった。裏返しにするのは何度かやっても難しく、ハンガーと裏返しの園服を持って担任のところに行くのだが、他児と話をしている様子になかなか自分の要求を言えない。そしてT児自身が皆と同じペースでやっていくために考えついたのがこの方法なんだろうな。T児がハンガーに園服をこのようにしてかけるようになるまでのことを思いながら、また、T児が誰か友だちと一緒にいることを願いつつ、私はT児のいる屋上へ行く階段を上がった。

屋上では、T児は鉄棒の近くでN児、S児がおしゃべりしているのを聞いている。そのとき、大きなサイレンの音が聞こえてきた。その場は一瞬静かになり、誰かが「小学校の地震の練習だ」と言う。幼稚園の向かいにある小学校の避難訓練のサイレンだったのだ。ちょうど数日前に起きた兵庫の地震の話になり、「地震で火事になったんだよ」「おうちがこわれたんだって」などと、自分の知っている情

報を話している。私が「みんなみたいに幼稚園に行っている子どもも、おうちがなくなつてごほんも少ししか食べられないんだつて……」と言つと、「おうちがないと寒いんじゃない」「着る服はいっぱいあるのかな」「きつと燃えちゃつたよ」「かわいそう」「うちの服送つてあげたい」などと、しんみりして話す。大地震のことを、四歳、五歳の子どもたちなりに受けとめて、心配している。私も子どもたちと一緒に兵庫の人々のことを思いながら、この子どもたちの感じる心を大切にしたいと思つた。

やがてT児らは保育室に戻り、H児、K児のしていたカルタを一緒に始める。「先生読む人になつて」と言われ、私は読み手になる。ところが、字の読める子どもは最後まで読まないうちにとつてしまうので、つまらなくなつて抜けそうになるK児。「ね、Nちゃんに負けないようにがんばろうよ」と声をかけて励まし、私なりに他児もとれるように読み方を工夫してみる。早く手をのせたほうが勝ちと

いうきまりになつてゐるのが、T児には理解できないようだ。「Tがみつけたの」とすねそうになる。しかし友だちに、「いまのはSちゃん」と言われると素直にそれを受け入れている姿も見られる。次はさつきからT児が気に入つて手にとつていたパンダ



の札。私はT児に「次を読むよ。よくカルタを見て探すのよ」と言う。そしてパンダの札をとることができたT児。真剣な表情から、パッと変わって嬉しそうな表情になる。「Tちゃんさつきから見えてたパンダがとれたね」とそっと声をかける。「とられちゃった」と言う友だちの声に、にこにこして札を皆に見せる。好きな友だちとカルタとりをして「とれた」という喜びを感じたT児。そしてそのそばにいて共に喜びを感じられるとき、私はやっぱり保育者になってよかったと思う。

カルタとりを続けているとO児が「遊戯室でカクレンジャーショーをやります。見に来て下さい」と言う。「あ、見たい」「何時からやるのかな」「聞いてくる」と言い、H児が遊戯室に行く。戻ってきて「長い針が四のところからだって」という声に、「じゃ、終わってからで間に合うね」と再びカルタとりを続ける。そしていったん終わって片付けてから見に行く。以前ならカクレンジャーと聞くとカル

タそっちのけで飛び出していくか、全く興味を示さずにカルタを続けるかだったように思う。自分のやりたいことがはっきりしてきてそれをやり遂げようとしながら、友だちのしている遊びにも興味を持って見に行くようになった、子どもたちの成長を感じ

る。

遊戯室では、男児五人が舞台の上でカクレンジャーになって、それぞれが思い思いにポーズをとっている。それを見ていた女児が「私たちセーラームーンやりたい」と言う。やりたい同士集まって、それぞれ自分のやりたい役を言い合っている。自分のなるものを決めたとたん嬉しくなるとびはねるR児、「Mちゃんはセーラーマースね」と他児の役まで気がまわるC児、何になってどう動いていかわからず戸惑うM児と、いろんな子どもがいる。T児も自分の好きなY児が入っているのを見て「やりたい」と言う。舞台上に立った子どもたちに保育者が「では何の役かひとりずつ言ってください」

と言うと、それぞれに自分のなりたいたいのを言っていく。いちばん最後に並んでいるT児、少しドキドキしながら自分の番を待つようすがうかがえる。私は「Tちゃんががんばれ」と心の中で応援しながら見ている。いよいよT児の番だ。ちょっと緊張した表情で「：セーラームーンです」と言うとい瞬、笑いが起こる。「男がセーラームーンだって」「Tちゃんは赤ちゃんのはずだったでしょ」などとという声が聞こえる。T児はこわばった表情のままだ。私は少し大きな声で「うそっこだと男の子でもセーラームーンになれるんだね。おもしろい」と笑う。するとまた笑いがおこり、T児の表情もやわらかくなった。こうやって、皆で笑い合えるとき、私は子どもたちとの心のつながりを感じる。ショーの歌を皆で歌い始めるが、歌を知らなくて不安そうな表情になるT児に、私は観客席から笑顔の声援を送る。T児を見ながら頷き励ましていると、T児は隣のY児を見ながら口の動きを真似し始めた。皆と一緒に、自分の

やりたいと思ったことをやれたT児。その後片付けをしながら私はT児に「Yくんやみんなと一緒に歌えたね」と声をかける。T児はちょっと照れくさそうに笑って、椅子を運び始めた。T児の成長を感じてなんだか私のほうが胸がいっぱいになっていた。

私が「先生」として、初めて出会う子どもたちの成長をいろんな場面で感じる日だった。明日、私がどうすればもっと子どもたちがセーラームーンショーを楽しめるのだろうか？ そんなことを考えながら庭を掃く。すぐに答えは出ないで、帰りの電車、お風呂の中や布団の中で今日のできごとを思い、また考える。そんなふうにして、今日も一日が終わっていく。ひよっこの私もそんな生活にやっとな慣れてきたかな…と感じる今日この頃である。

(東京都文京区立第一幼稚園)